西朋

16

1967-11

西朋登高会

目　　次

1. 山行報告 …… 3

㊀ 夏山合宿 …… 3

a、 第1隊・ 日本海隊 …… 3

b、 第2隊・ 北鎌尾根隊 …… 8

c、 第3隊・ 黒部源流隊 …… 14

d、 涸沢定着合宿 …… 15

㊁ 北岳バットレス …… 20

2. 山行計画 …… 21

3. 会務報告 …… 22

4. 西高W.V.部活動状況 …… 25

編集後記 …… 27

山　行　報　告

㊋夏　山　合　宿

今年の夏山は３隊に分れて横尾へ集中し、その後涸沢定着合宿を行った。以下はその報告である。

第１隊　日　本　海　隊

◎参加者　（C.L）平木　（S.L）小池、三浦潤、山野

◎７月１１日

新宿（23.00）═══

梅雨もあけやらぬ日、縦走第１陣の４人は、盛大な見送りの人達におだてられたり、なだめられたりして、勇躍新宿を後にした。

車中での独白―１０日間も歩くとはねエ―急行なら２時間だと云うのに―

◎７月１２日（曇後雨）

═══平岩（07.06～08.55）═蓮華温泉口（10.25～10.40）― 兵馬峠（12.55～13.10）―瀬戸の渡（13.45）―白高地沢（14.55）

カモシカ原での幕営は罷りならぬ、と蓮華温泉で言渡され、行程を縮小し白高地沢までとする。縦走の第一歩を挫かれた感じ。アヤメの花咲く湿地帯を兵馬峠へ向う。歩きにくいことこの上なし、瀬戸川では珍らしいモッコ渡の御厄介になる。利根の奥で一度乗ったことがあるが、快適とは言い難い。机上計算より１Ｐ余計にかかり白高地沢に着く。この沢は上下２本のワイヤーを利用して渡る。

おやすみソングは「困っちゃうナ」と決定。

夜来風雨声。

◎７月１３日（雨）

停滞。幕営地が水際のため、終日増水が気になる。ひまな御仁は早速トランプ作製にかかり、河童橋で「柿の種」をやると云うのを罰則にして勝負開始。

◎７月１４日（霧後雨）

出発（08.15）—三角点（09.45）—カモシカ原（10.30）

出発の判断に迷ったが、小雨をついて出る。五輪尾根に取付き、1P目は下草の多い滑りそうな不愉快な道。そこを抜けると早くも喬木は姿を消し、お馴染の高山植物にお目にかかれる。三角点を過ぎる頃風雨が強くなり、水芭蕉の咲く雪渓の下で幕営を余儀なくされる。午頃雨は止んだが、霧が濃く風も強かった。この日山野に新しいエピソードが生まれた、勿論メシに関して。

◎7月15日（雨後霧）

出発（11.15）—八兵衛平（13.15）—朝日岳（14.30）—小桜原（16.25）

兵糧は充分だが、水攻めの感あり。雨も三日目になると腰がすわってくる。しかし晴間を見て強風の中を出発。1P目の尾根道ではZIGの時は追い風、ZAGでは向い風、計算上ではトントンになりそうだが進行を妨げられること甚だしい。花の終ったウルップ草が目立つ。八兵衛平附近は踏跡の不明瞭な大きな雪田が多く、ルートの判断が難しい。小屋跡を過ぎ、四日目にして最初のピークに立つ。しかし無念なるかな、僅かの眺望も得られず感嘆の叫びをあげ得ぬまま朝日岳を後にする。樹林の中を下り、その名に背かぬ小桜原を過ぎる頃、突然山野の靴が謀叛を起し、前進を拒否したため、燕岩の予定を変えて幕営する。時期が早いせいか朝日岳近辺は雪が多く水場にはこと欠かない。

◎7月16日（曇後雨、午後晴）

出発（05.30）—雷倉岳（08.15）—鉢鞍部（11.30）

山野の靴を針金でがんじがらめにして出発、定刻に出られたのはこの日が初めて。我々と行を共にするブユのパーティに悩まされながら燕岩の下を通り雷倉へ。毎日行動時間が短いので疲労感は全然なく、大きな雪倉も難なく越える。鉢巻の雪渓で昼食後、這松の中に身を沈め午睡とシャレテいるところへ人の声、しかも女性の。そこに現われたのは女性ばかりの5人、入山5日目にして初めて会う人の懐しさ。

鉢鞍部に出る頃冷い雨が降りだし、激しくなるばかり。この鞍部からは今までと山容が変り吹きさらしの岩尾根となるので進退を苦慮する。小池と幕営地探し、結局捲道を少し戻って幕営する。午後はおだやかな天気となり白馬の頂も遠望出来た。山野は水道工事に精を出し、怠者はシュラフの乾燥。

夜初めての雷雨に襲われ天幕から逃げ出す。梅雨明けの前触れであるように—西朋移動気象班の予報では明日は晴と云うことだが—

◎7月17日（雨後曇）

出発（07.45）—三国境下（08.35）—白馬山荘（09.50～11.55）—白馬鑓岳（14.30）—天狗池（15.25）

しかし、一夜明けて正解は雨でした。様子を見て出発したが、1P歩くと再び雨。嫌になったとも言っていられない、歩かなくては……　次のPで白馬岳、眺望絶佳、遙かに槍が望め—と言いたいところだが、見えるのは前を歩いている潤のザックのみ。頂上は素通りして山荘で天気待ち。こう降られると山にいると云う超然とした気分もなくただ惨めな気持で絵ハガキを書く。しかも憶えている住所自宅のみと言う情ない4人、ますます惨め。

だが、昨夜の雷はやはり良い報らせだった。雨はあがり、以後すっかり夏型になった。うれしさのあまり山野は鎖の頂上で逆立3回。

◎7月18日（晴）

出発（06.00）—大下り始点（06.50）—不帰II峰（09.15～10.15）—唐松山荘（11.25～12.15）—白岳小屋（14.55）

天狗の頭で初めて槍に見参。我々の縦走の最終ピーク．本当に遠い。しかし到達した時のことを考えると今から感激に胸が踊る。

大下りは2，3ケ所注意すればよいだけでさほど困難ではない。不帰II峰の上りは荷が小さければ何でもないが、キスリングではつかえて時間がかかる。唐松小屋まではポピュラーな縦走路なのでよく整備されているが、ここを過ぎると途端にひどくなる。白岳まではかなりのアルバイトだった。小屋附近は雪は豊富なのだが水を取るのは苦労する。

◎7月19日（晴）

出発（05.30）—五龍岳（06.20）—キレット小屋（10.30～11.00）—吊尾根（12.35～13.35）—鹿島槍南峰（14.00）—冷池（15.25）

五龍の上りは岩場があるが大したことはない。キレット小屋はよくまあこんなところに、と思うような場所にあり、北アの厳しさを象徴しているようだ。鎖のあるキレットを通り、鎗北峰の下を過ぎると、あっさり吊尾根に出てしまう。ここは雪渓も豊富だしテント場として快適そうだ。水を作る間に北峰まで往復する。南峰では北の方から順次三角点を修理して来たと言う国土地理院の一行に会った。ここまで来れば冷池は目の下だ。森林限界にくるころ雨が降りだした。

夜は雷様におどかされ、度々天幕から逃げだした。

◎7月20日（曇）

出発（07.30）—種池（09.25）

冷池附近は汚い雪が少しあるだけで飲料には適さず、止むを得ず水を買う。1ℓ50円也、しかし天水に頼っているのだから文句も言えない。この辺りはコバイケイソウ、ハクサンイチゲが美しい。爺岳から見る双耳峰は五龍からのにまして逸品である。だが、沈黙は最高のことばない、か。

種池附近や明日からのコースは北アでも陽のあたらぬところだが、それだけに落ちついていて静かだし、小屋もこじんまりとしていてどこか人を魅きつけるところがある。そろそろ日数も気になりだすが、必ずしも全員が好調ではないので晴天沈没とする。

◎7月21日（晴）

出発（05.25）—新越乗越（07.00）—鳴沢岳（07.45）—赤沢岳（08.35）—赤沢・スバリのコル（09.30～10.20）—針木峠（12.05）

この日のコースはかなり時間がかかると聞いていたので覚悟していたが、意外だった。道も歩き易く、剱に一番近い赤沢岳を通るなど景色もよかったので、疲れることもなく針木峠に着いてしまった。

針木谷はうっそうと茂り、明日からのコースが逆コの字型に見え、はるかかなたには大分近くなった槍の穂が望まれる。北に目を転ずれば扇沢の雪渓が眼下に続き、上方には種池の小屋、さらに鹿島の双耳峰と、前後何日間かの我々の動きを一望にすることが出来る。

◎7月22日（晴）

出発（05.40）—蓮華岳（06.30）—北葛岳（08.45～09.30）—船窪小屋（11.05）

駒草の多い砂礫の広い尾根をダラダラ登ると蓮華岳に達する。北葛乗越へは一気に500M下る。北葛岳の登りは這松と石楠花の中を行く。丁度花期らしく、見事な花を楽しめた。七倉岳を下るとすぐにひなびた船窪小屋に出る。北アには珍らしい丸太組みの小屋で、いろりまである。是非泊ってみたい小屋だ。幕営地は薄暗いところだが、水場は素晴しい。思いがけぬところから豊富に湧き出ている。このところ連日午までに行動が終ってしまうので午後はのんびり出来る。しかし早い日には12時頃からゴロゴロ始まるのでこれでよいだろう。10日余もたった4人で暮しているので互に顔を見飽きたのか現役隊のことがしきりに話題に出る。計算では西遠あたりで追付けそうだ。台風が発生したので明日は三ッ岳まで足を伸ばすことにする。

◎７月２３日（晴）

出発（０５.５０）―船窪岳（０７.３５）―不動岳（１０.１０～１１.００）―南沢岳（１２.０５）―烏帽子岳（１３.００）

不動沢の荒々しい崩壊を左下に見て乗越へ下る。ここからは昨年のコース、二度とこんなところには来るまいと思ったことを想い出し、小池と二人で自分達のバカさ加減にあきれる。だが、勝手知った道はいくら暗くても何となく心にゆとりがある。乗越附近は年々にえぐられて道が不安定だ。鉄梯子のある嫌な上り下りを通過し、熊笹の中を急登して船窪岳に出る。ここは本当に眺めが悪い。僅かに不動岳が大きな姿の一部を樹間にのぞかせているだけだ。不動、南沢と経ていよいよ裏銀座らしい稜線プロムナードになる。楽しみにしていた四十八池附近は雪がなく、すっかり落胆した。昨年はツガザクラとチングルマが入り交じり、水は豊富で空は穏やかに晴れ渡ると言う楽園の一日を過したのだが。今日は陽光は強いが妙に風があり暑さを感じさせない、台風のせいだろうか？

この辺りからは表銀座の稜線が良く見える、こちらからは平らに見えるが、向うからはこちらが平らに見えたそうな。自分のところだけ辛く感じるものだ。

ニセ烏帽子の登りにかかった時、トップの小池がふと目をあげると秋山と現役の中尾の顔が目に入った。「おい、秋山」「よおー」サードの潤は「秋山さん」と一声。ひしと抱き合い涙にくれる彼等の傍らで慈悲深い笑みをうかべ、暖く目を細める梶内さん―あとは１０日余りの苦労話に花が咲く。明日の行動を半日共にすることにして、我々も泊ることにする。久し振りに賑やかになった。青い物に飢えていた我々はリンゴをおし敷く。ああこの感触。

◎７月２４日（晴）

出発（０５.０５）―三ツ岳（０７.０５）―野口五郎岳（０９.５０）―赤岳（１２.３０～１３.２０）―鷲羽岳（１４.２０）―三股遊華小屋（１５.１５）

現役と共に出発したが、人数が多くゆっくりなので、我々とは一寸とペースが合わない。

付添いと言う新しい仕事が出来たわけだが、裏銀のコースは上り下りも少く、道も良いので活躍場面がないのは幸と言うべきか。台風も心配ないことがわかり気も楽になった。明日は登れる槍を真近に見ながらの稜線漫歩はこれぞ夏山である。

赤岳につき、現役隊はここで幕営、我々は昼食をとり鷲羽に向う。元気の良いのが１Ｐで登ることを宣言、この時の速さは素晴しかった。今日唯一のエネルギーのはけどころとばかり他パーティを次々と追い越して驀進した。

鷲羽の頂では池を隔ててガスのかかった槍に手がとどきそうだ。かすかに硫黄の匂いが漂い、ふり返れば黒岳がいかにも堅そうな岩稜をくっきりと空に画す。誰言うとなく「今日で13日目か」に傍の年輩のアラインゲンガー、びっくりして「えっ、君達一体どこから来たの？」

三遊の幕営地はさすがに賑やかだ。我々は自分達だけが、多くても4張位の夜を重ねて来たので、このにぎやかな晩はなかなか寝つけなかった。

◎7月25日（曇）

出発（06.50）—双六小屋（08.10）—槍の肩（12.15～14.10）—二の俣（17.00）—横尾（17.50）

今日中に横尾へつけば良いと言うことで、少し朝寝をする。皆3度目、4度目と言う道を双六小屋へ向う。途中、お茶大W.V.のパーティに紛れ込んだ佐久間を見付け、潤「あれ、お前そこで何をしてるんだ？」

—何故か元気の出た我々は、昨日に劣らぬ速さで双六小屋着。冷したトマトを横目でにらみ、長い西鎌にかかる。適当に雪も残り、黒合百の群落も愛でて満足だが、如何せんカンジンの槍が見えない。肩直下のジグザグの始まりで一本立てて、いざ行かんと歩き出したら一登りで肩に出てしまった。もう登るべきところはない。あと数時間で縦走も終りだ。ゆっくり休んだ後、20何番目かの三角点を踏む。ガスが晴れず、穂高連峰は殆んど見えない。これから印象の悪い槍沢の下り、2Pで二の俣だ。この辺は6，7年前とかなり様子が変り、随分明るくなったようだ。横尾までの最後のピッチでは先に来ているだろう北議隊の顔が目に浮ぶ。

そろそろ天幕が見えだす頃から、しきりと声をかけるが返事がない。山荘前で声を聞きつけて飛び出して来た3人と対面、とたんに気がゆるんだのか、2週間の疲れが出たのか、天幕を張るスピードがおそい。幕営完了、長かった縦走も終った。いろいろなことがあったが、それも教訓となって生きよう。

いつかある日、地図を並べて、若き日の縦走のことを想い、満足して唇をほころばせる自分の姿を想像しながら眠りについた。

（平木　記）

第2隊　北鎌尾根隊　報告

夏山合宿の前半の縦走に当り、日頃からやりたいと思っていた形式・内容の山行を計画した。

メンバーは、（L）上遠野、宮武、滝口の3名。コースは、表銀座を縦走後

天上沢を下降、北鎌沢より北鎌尾根に登り槍・穂高を縦走後白出沢を下降、滝谷を遡り四尾根を経て濁沢へ下山する、と云うものである。

北鎌尾根と、滝谷の雄滝の登はんがヤマと見て、慎重に検討の上決行に移った。

◎7月16日

新宿（16.15）═松本（22.50～01.20）═中房温泉（02.35）

日曜の午後と云うのに、わざわざ出向いて下さった多数の見送りをうけ（それにしても、昨年の時刻表で決め、15.30発等と宣伝し、迷惑をかけましたこと申訳ありません。）

16.15発の普通列車で松本へ。

松本で始発電車までビバークする予定だったが、強烈な蚊の攻撃に敗退、遂にねぐらを求めて町に出る。旅館をさがしたが泊代が折り合わず、あきらめかけたところでタクシーと交渉成立、01時に中房温泉に向けて出発、2,440円の出費となった。

テントを張り仮眠する。

◎7月17日（雨後晴）

出発（06.45）—合戦小舎の頭、昼食（10.20～11.10）—燕岳（12.30～12.45）—幕営地（13.15）

出発後すぐ俄雨。第一ベンチで小休、ここの水場は良いところで水がうまい。調子が出ず5Pで稜線。大天井まで行けず、蛙岩手前の東斜面で少し早いが幕営とする。雪渓もあり展望も満点で素晴しい場所だ、劍も見える。パトロールにみつかったが、薪を使わなければ良しとのこと。飯はガンタ気味であまり喰えなかった。

◎7月18日（快晴）

出発（06.50）—赤岩岳、昼食（10.05～11.20）—幕営地（14.45）

ガンタ飯をリゾットにして、一寸手をつけて出発。1P目が吊岩手前のコル2P目が切通岩の手前、3P目は大天井ヒュッテの先、4P目の赤岩岳頂上で昼食とした。

皆大分まいっているため、水俣乗越までの凸凹での疲労及び雪渓上でのバランス劣化を考え、偵察の結果すぐ先のコルから天上沢へ落ちる急なガレ沢を下ることとする。偵察の帰りに宮武が半分も残っているみかんとトマト・ジュースの缶詰を拾い、にこにこして喰う。下りはじめたが、滝口がしょっ中転倒し

又宮武が鼻血を出す等して時間のロスがあった。途中からスピード・アップして高度差800Mを一気にかけ下る。傾斜が緩くなり、ブッシュになったが、右岸の小沢に移り大したヤブこきもせずに雪渓のある沢につき、大休止をとる。この沢の上部天上沢本流から500M手前は高度差約100Mの垂壁で、かなり高度な登はんが楽しめそうだが、まだ取付いた人もいないだろう。沢を下り本流に出たところの対岸が北鎌沢出合だった。

砂地の良いテント場で薪をふんだんに使い、おいしい紅茶やハヤシライスを作った。

18時頃背学らしい一行3名が対岸にビバークした。

◎7月19日（晴後雷雨）

出発（07.10）—二股、昼食（10.45～11.50）ザイルを着ける（12.40）—コル、幕営地（14.15）

1Pで雪渓末端へ。正常ルートは右股らしいが、雪渓が稜線まで続いているのを表銀から確認していたので左股をとることにする。2P目は緩い雪渓を登るが、滝口がバテたので宮武にずっとトップをやらせる。3P目に宮武もバテ出しスリップが多くなる。4P目が終る時に雪渓をはなれて左岸の岩に取付いたため時間をロスした。そこで昼食。

すぐ先が二股で、左は雪渓だがスリップがこわいので右のガレ沢を行く。この辺りから雲が多くなり、再び雪渓が現れた時雷雨となった。スリップを警戒してザイルで確保する。雪渓を終って稜線に飛出す頃、一時雨があがった。20Mばかり戻ったテラスに良いテント場をみつけ、独標を偵察に行っている間に又雨が来たので、あわててテントを張る。

夕方水晶方面でいつまでもピカゴロやっていたが、こっちも場所が場所だけに不安だった。

◎7月20日（曇後晴）

出発（09.20）—独標（10.50～11.35）—P14、昼食（12.30～13.15）—北鎌平（15.55）—槍岳（16.55～17.10）—幕営地（17.30）

朝起きた時は天気が悪く、時々雨が降っていたので様子を見ることにしたが、小康を保っているので独標のテント場までのつもりで動き出した。独標はザックがなければ面白い岩場である。正常ルートを行き、初めは良かったが、廻り込むあたりが悪く、ザイルを2度使った。沢状のところを直上し、独標に出る。小休の時に宮武がザックを落し、取りに行ったが荷物が散乱していて出発がおくれた。天気が保ちそうなのでどんどん飛ばす、上り下りは非常に激しく消耗

する。Ｐ１４附近で昼食。岩登りを終った阪大山岳部とコールを交す。Ｐ１４はアプ・ザイレンで下り、次のＰは雪のあるところで休んだが、その後路を間違えて稜線へ出るのに苦労した。

北鎌平手前の最後の大ピークで小休、東鎌尾根上の登山者が良く見える。北鎌平はゴーロで４斗缶がゴロゴロ転っている。ここから大槍まではケルンに導びかれて行く。初めはやさしかったが、大槍直下２０Ｍばかりが悪い。頂上に出るとカメラをこちらに向けた人が二人いた。妙な方向から風態の悪いのが登って来たのでよっぽど驚いたらしい。

頂上で少し休み、肩のテント場で泊ることにする。雪渓の末端の水は止っていた。

夜パトロールが他のパーテイのことを聞きに来たが、我々が北鎌から来たことはちゃんと御存知でした。

２２時少し前に就寝、なお北鎌尾根は雪さえあれば幕営地は数ケ所可能である。

◎７月２１日（ガス）

出発（０8.5０）―南岳、小憩（１1.0５～11.1５）―キレット（１1.1５～１2.0５）―北穂高岳（１5.1５～１5.3０）―幕営地（１5.5０）

昨日の疲れが残っているためにゆっくり起きた。目的地は北穂高岳とする。

中岳頂上が１Ｐ目、下りは雪田を使ったが、グリセードに不安のある宮武と滝口はガレを下るはめとなった。５月の訓練だけでは夏の雪を荷を背負って下るのは不可能に思える。末端に水が出ていたので水をつめる。

２Ｐ目は南岳の三角点、３Ｐ目でキレット、ここで昼食にする。最近うまい飯を喰ったのは北鎌沢出合の日のみであとはガンタ、今日もそうだ。登り降りをくり返していよいよ登りと云う所で小休、Ｂ沢のレリーフまではかなりきびしく、きわどいコースである。

レリーフにおまいりをして、頂上へ、小屋で滝谷入山の届出をする。今年は未だ一頁分位しか入っていない。滝谷はかなり雪がある。

天気図によれば台風が発生した。南稜でのテントは今年最初らしい。薪を使えないので炊事は時間がかかる。

◎７月２２日（快晴後雷雨）

出発（０7.0５）―涸沢岳（０9.0０）―分岐、昼食（１2.2０～１3.1５）―滝谷出合（１4.5０）

朝焼が気になる。余分な荷を例の岩小舎に置いて、サブ(2)、キスリング(1)で

出発。１Ｐ目は四尾根の頭と濁沢槍間のコル、２Ｐ目の濁沢岳の登りは急で脆い。白出のコルから白出沢へかけ込む。１５０Ｍ程下に雪渓があり休む。この雪渓をグリセードで下ろうとしたが、やはり軽荷になっても二人とも上手くないので、キック・ステップで下らせた。

セマ谷出合を過ぎ中継小屋からは森林帯の中の実に急な道だ。下の河原で、さっきの雪渓から一緒のおじさんからスルメ４枚もらった、いろいろ知ってる人で槍平への分岐の手前に広いトラック道が出来たが、それを行っては駄目だと云う知識を得た。分岐で昼食とし、出発しようとしたら雷雨がありビニールをかぶった。細い道を１Ｐで滝谷出合へ。

右岸のおがくずの上にテントを張る。水も近く良い所だ。小沢との出合に岩小舎発見、５人は大丈夫。食事の後雨が止んだので河原に戻り明日登る雄滝や上部の岩壁を見上げた、ドームが大きく見えた。

◎７月２３日（快晴午後ガス）

出発（０５.４５）—雄滝下（０６.１５）—上（０９.００）—合流点昼食（１１.５０～１２.５５）—稜線（１７.１５～１７.３０）—岩小舎（１８.１５）

０２.３０起床し、飯を０３.００に喰べたが、昨晩シュラーフなしのビバークで良く眠れなかったため更に３０分寝た。

最初左岸を行ったが、すぐつまり橋まで戻って右岸を行く。雄滝は圧倒的な感じで目前にある。雌滝は陰険だ。ベルクシュルンドを慎重に下り、中間スラブを流れる小滝の左に取付き、小滝を廻り込んで右壁に出るのだが、大分悪いところもある。１Ｐ目は廻り込んで右に斜上したテラスで滝口を確保。２Ｐ目にアブミを使う所が２ケ所ある。３Ｐ目は岳樺等の根につかまりながら登り、ヒョングっている落口と同じ高さに出る。この辺りから再び出合が望め、１０人程休んでいるのが見えた。

雄滝の左岸は岩燕の巣があり、沢山飛んでいる。５Ｍ程直上し、右にトラバース、２本バンドがあるが、下のバンドはすぐつまるので上のバンドを４０Ｍ一杯で河原に出る。

すぐ逆層の滝がある。これは登れないので沢を対岸に越えて左岸寄りに落ちるスラブ滝を捲き込み、中央のチョックストーンの様な岩の右を登る。その上はすぐ雪渓となり、３０分程堅い雪をキックステップで登る。

いよいよ滑滝だ、雪渓の末端からザイルを雪の突出部に捲きつけてアブ・ザイレンで降りて左壁に取付く。ふり返って驚いた、宮武と滝口のいるすぐ下はガランドウだ!!

滝の半分は残雪にかくれて見えない。落石がその間に吸込まれる様に落ちて

行く。二人を慎重に降し、いよいよ登はんだ。３Ｐ逆層のスラブを登って垂直の滝の左側の壁を吊上げ気味に登る。かなり困難なルートだが、これ以外には見当らない。すごいでかい浮石が落ちる。（左岸はハング）　１５Ｍ登って右にトラバースして終りである。スラブを行くが、落石が沢山転がっている。ゴルジュの最後のチョックストーン滝を左側から越えると雪渓となる。もう合流点は目と鼻の先である。四尾根の末端とおぼしきところで今日はじめての休みそして食事にする。

ガスが出て来て見通しが悪くなり、Ｃ沢と思われる沢に入ったが、４０分程で行詰り戻って今度はＤ沢と思われる沢をつめ、スノーコルに行くことにした。しかし結局スノーコルは見付からず、過去一度も四尾根を登っていなかったことが悔まれた。だんだん急な雪渓となり、雪の上に落石がまるでガレの様に重なったところに出る。いよいよ脆くなったので小休をとって引返すことを考えたが、休の間にガスが一時晴れ、稜線を望むことが出来た。２００Ｍ程上で、人が歩いているのも見えた。

元気を出して岩尾根に取付いたが、すごく脆い尾根だった。ザイルを出し、３Ｐで縦走路に出た。やっと緊張から解放され、縦走路を、地面がしっかりしていることの幸を味わいながら岩小舎に向う。

今日は神経が疲れたが、充実した一日だった。

南稜にテントが２，３張あった。我々は疲れたのでそのまま岩小舎に泊ることにした。夜おそくまで、いろいろ喰べて、そして寝た。

◎７月２４日（晴）

出発（１０.００）―岩小舎撤収（１７.２０）―横尾（２０.４０）

ゆっくり寝て、ヌガンタを炊き、直しているうちに１０時になった。涸沢合宿に出ない滝口のために、水野クラックと北穂チムニーに行くことに決めた。

水野クラックは何と云うことなく終了。

北穂チムニーは取付が判らず、アプ・ザイレンで降りたが、他に適当なルートはなさそうだ。最初はハングで強引に左側より乗越す。チムニーを少し登り右壁に移る。スラブ状を越えてチムニー内で確保、次でチムニー内をガリガリ登り中央バンドに到り、そこからはチムニー及び左右の壁を自由に登る。短いが面白いルートだ。

涸沢に下り、１Ｐで丸木橋あとは暗やみの中を横尾へ。橋のたもとにテントを張って、滝口の２０回目の誕生日を迎えて寝た。

◎７月２５日（晴）

１０時頃テントを出て、横尾の岩小舎を見物させ、その後徳沢まで米購入の確認及び外食のため往復。

（上遠野　記）

第３隊　黒部源流隊

最初の計画では、（Ｌ）秋山以下３名で、７月１６日朝出発し、太郎兵衛平―高天原―（温泉と岩魚釣）―岩菅谷―雲の平―五郎沢―三俣蓮華岳―槍岳―南岳―天狗平―横尾　と云うバラエテイに富んだものだったが、出発前日から秋山が風邪で発熱し、参加不能となり、又西高現役の夏山コーチに予定していた古いO.B.が一人も参加出来なくなった等の条件が重なり、現役コースの近くをうろつく我々が面倒を見ることになり、計画は全く圧縮されたものになってしまった。

◎参加者　（Ｌ）梅原、尾崎

◎７月１７日

上野（10.00）═══ 富山 ┅┅┅ 小見

◎７月１８日（晴後曇）

小見═折立（11.25）―次郎兵衛平（13.45～14.40）―太郎兵衛平（16.40）

◎７月１９日（晴、夕立あり）

出発（08.00）―薬師沢出合（09.25）―Ａ沢手前、昼食（11.20～12.15）―高天原峠（14.10）―幕営地（14.40）

◎７月２０日（曇時々雨）

出発（09.00）―雲の平山荘（11.20）―薬師沢出合（14.25）

◎７月２１日（晴）

出発（08.20）―三股、昼食と釣（09.40～12.00）―太郎兵衛平（12.40）―次郎兵衛平（13.40）

◎７月２２日（晴、夕立あり）

出発（09.40）―折立手前（10.20）西高現役と合流（以下略、西高現役の項参照）

と、以上の如くである。

現役指導を第一義に出されてしまったので、又人数が二人だけと云うこともあって、期待していた黒部源流の沢登りも出来ず、夏山の前半をやっているのだと云う実感はあまりなかった。

岩魚は釣れなかったが高天原、雲の平は非常によい所だ、厳しい山行の間に一度は行ってみたいところだが、間をつなぐルートはまだあまり人が通っていないので悪い。

（梅原　記）

涸沢定着合宿

○期間　7月27日～8月4日

○参加　（L）秋山、上遠野、三浦等、梅原、宮武、尾崎、小池、三浦潤、山野、平沢、川田、福田、吉田

○器具　ザイル40M（6）ハンマー（12）カラビナ（50）ハーケン（タテヨコ各30）アブミ（12）

◎7月26日（晴、午後俄雨）

横尾集結最終日、荷上等を行う。

○秋山、梅原　槍岳―南岳（横尾々根偵察）―北穂高岳―涸沢

○上遠野、宮武　横尾から島々往復、食糧買出し

○小池、三浦潤、山野　横尾から上高地往復、荷上

○梶内、尾崎　西高現役と共に、双六池―槍岳―横尾

○平沢、三浦等　入山―横尾

涸沢泊の秋山、梅原を除き横尾集結を終る。

◎7月27日（快晴）

涸沢入、荷が多かったので荷上は二回に分けた。

○梶内　下山

○秋山、尾崎　尾崎は横尾から現役について涸沢入、秋山と共に北穂高岳往復。

○平沢、上遠野、三浦等、宮武、小池、三浦潤、山野　第一回荷上（12.30涸沢着）

梅原は涸沢より横尾に下り合流

○秋山、上遠野、梅原、宮武、尾崎　第二回荷上（18.25 涸沢着）川田入山し、横尾で合流

◎7月28日（晴後曇）

タイムは取付から終了までとする。

○平沢、梅原　ドーム中央稜（11.50～15.30）

○川田、上遠野　PⅡフランケ右（不明）

○秋山、三浦等、尾崎　クラック尾根（12.00～17.00）

○日本海隊と宮武は休養とする。

ドーム中央稜で、他会パーテイの一寸した事故があり、梅原ショックで中央稜上部は中止し、三尾根側へ逃げる。B沢を下降したパーテイはT4へのトラバース・ルートを間違え時間を喰ってしまった。

○福田、吉田　入山、涸沢入

◎7月29日（晴）

○平沢、川田　第一尾根（10.50～14.10）

○福田、梅原　クラック尾根（10.45～14.50）

○宮武、小池　クラック尾根（11.00～15.20）

○上遠野、三浦潤　ドーム中央稜（10.07～11.47）

○秋山、吉田　第二尾根（10.45～11.50）

○三浦等、山野　第二尾根（10.50～12.45）

◎7月30日（晴後曇）

○平沢、福田　PⅡフランケ右（12.30～16.00）

○尾崎、小池　PⅡフランケ右（12.45～15.45）

○上遠野、三浦潤　第四尾根（10.07～14.50）

○梅原、吉田　第四尾根（10.00～14.50）

○秋山、山野　ドーム中央稜（12.00～15.00）

○三浦等、宮武　ドーム中央稜（11.20～14.30）

○上遠野と、休養していた川田は南峰の岩小屋泊

◎7月31日（晴後薄曇）

○川田、上遠野　グシボン尾根（06.00～10.10）後川田は下山

○尾崎、吉田　ドーム中央稜（12.45～15.30）

○小池、三浦潤　第二尾根（12.20～14.50）

○平沢、福田、秋山　　昇風の頭より横尾々根偵察後平沢、福田は下山
○三浦等、梅原、宮武、山野は休養

◎8月1日（晴、一時雷雨後晴）
○尾崎、宮武　　四峰甲南ルート（09.15～11.45）
○梅原、山野　　四峰甲南ルート（09.25～15.30）
○秋山、三浦等　　第四尾根（09.00～13.40）
○上遠野、小池、三浦潤、吉田は休養
各パーテイ共12.00頃より降りだした激しい雷雨に逢う。
甲南ルート……四峰のルートの中で一番混む、むつかしいのはT3からの1Pのみであとは面白くない。あまり良いルートとは云えない（尾崎）

◎8月2日（晴後曇後雨、夕方晴）
○秋山、三浦潤　　第一尾根（10.00～12.35）
○宮武、山野　　第一尾根（10.20～14.30）
○梅原、小池　　第一尾根（10.30～14.45）
○上遠野、吉田　　クラック尾根（09.35～12.00）
○三浦等、尾崎は休養

◎8月3日（晴）
○秋山、上遠野　　前穂東壁右岩稜（07.00～11.15）
○小池、三浦潤、山野、吉田　　5，6コル—北尾根—ザイテン
○梅原、宮武　　PⅡフランケ右　　三浦等、尾崎、第一尾根の予定で出かけたが、前日ダイアモンド・フエースで事故があり、遺体をC沢から上げるためにC沢下降及び第二尾根関係が禁止され、B沢に他パーテイが集中したため以上二パーテイは中止とした。
以上で涸沢合宿は無事終了した。
涸沢（17.00）—徳沢（20.15）泊

◎8月4日（晴）
徳沢（10.15）—上高地（12.30）
上高地から松本までマイクロ・バスをチャーター。10人乗6,000円
松本駅で解散

（秋山　記）

剱沢合宿登はんルート表

	クラック	一尾根	二尾根	ドーム中央稜	四尾根	PII フランケ	グレポン	北尾根	甲南	右岩稜	計
平沢		29		28		30A					3
川田		29				28	31				3
福田	29A					30A					2
秋山	28	2A	29A	30A	1					3	6
上遠野	2			29	30A	28	31			3	6
三浦等	28		29B	30B	1						4
梅原	29A	2C		28	30B				1B		5
小池	29B	2C	31			30B		3			5
宮武	29B	2B		30B					1A		4
尾崎	28			31		30B			1A		4
三浦潤		2A	31	29	30A			3			5
山野		2B	29B	30A				3	1B		5
吉田	2		29A	31	30B			3			5
パーテイ	4	4	3	5	3	3	1	1	2	1	27
人員	9	8	6	10	6	6	2	4	4	2	57

グレポン尾根

○期日　　7月31日

○パーテイ　　川田、上遠野

○器具　　ザイル40M(1) カラビナ(20) ハンマー(2)
ハーケン(タテヨコ各5) アブミ(5) ボルト(2セット)
アイスハーケン(1)

7月30日に二人で岩小舎に泊る。明方寒かった。

7月31日(晴)

03時半起床、簡単に朝食を済ませて、C沢左股をただ二人で下る。三尾根を廻り込んでグレポン尾根へ、取付は06時、未だ誰もいない。1P目上遠野トップで脆い岩稜を登る。2P目はシーソーで川田トップ、20M位上が岩が脆く大分悪かった。この辺りでC沢に人が見えた。3P目トサカ岩基部で確保、クサビを1本拾う。トサカ岩は完全な垂壁で、3段のハングがある。高さ30M

程。１Ｍ程吊上げ、すぐアブミでハングを越す。ハングの下でカラビナ１個拾得。このハングの下のカラビナを外さなかったため、ザイルが重くなってしまった。それにしても困難なピッチだ。二段目のハングを越えたところでアブミ確保し、川田とトップを代る。最後のハングはクサビが打ってあるが、１本抜けていたので拾ったクサビを使う。クサビは各パーティに１本位は必要と思う。ハングを抜けて脆い岩を少し行くとトサカ岩は終る。ここで大休止をとる。トサカ岩は非常にむつかしく、体が完全に宙に出て気分がよい。下の３人パーティがすごい落石を起し、まわり中からどなられていた。ローソク岩とのコルへの下りはトンテンカンだ。そこから縦走路へ向って脆い急な壁を登る。途中きわどいところで靴紐が外れた。（高橋製）　トサカ岩のハングの時も外れたが、ほどけたのと違って頭に来る。

２Ｐでザイルを解き縦走路へ出る。登はん終了１０時１０分。充実した登はんだった。

（上遠野　記）

前穂京壁右岩稜

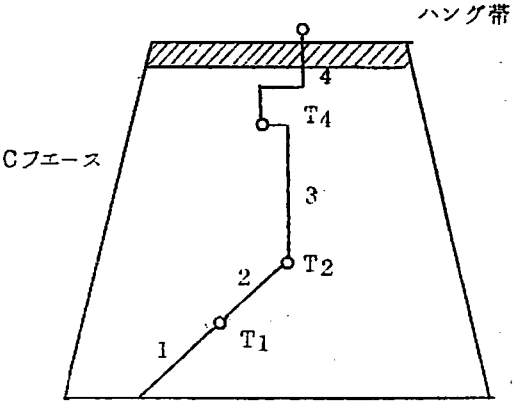
○期日　　８月３日

○パーティ　　秋山、上遠野

○器具　　ザイル４０M（１）　カラビナ（２５）　ハンマー（２）
　　〃　ハーケン（タテヨコ各５）　アブミ（６）

出発（０４.００）―Ｃ沢入口（０６.００）―取付点（０７.００）―右岸稜終了点（１０.２５）―前穂頂上（１１.１５）―吊尾根の枝尾根より雪渓に出て涸沢へ下る

○取付点まで　　Ｃ沢入口よりＣ沢を登る。昨年より雪が少く所々切目あり、インゼル上端よりやや上部の幅広い涸滝を登ってから左へトラバースＢ沢を横断する。右岩稜の基部を左へ捲いて取付点、右岩稜中央部よりは大分左寄である。



○１Ｐ　　幅２０CM位の右上するバンドのトラバース、簡単だがもろい（３級）３０M

○２Ｐ　　１Ｐと同じトラバースの続き　（３級）20M

○３Ｐ　　Ｔ2 のやや左側の浅いクラックがルートだが、オープン・クライムである。ハーケンは良く利いたものが連打されている。

ホールド、スタンスも細いがしっかりしている。傾斜は垂直に近い（４級）30M

○４Ｐ　　１Ｍ直上し、小さいカンテを２Ｍ右へアブミでトラバースし、ハングに入る。ハーケン連打、良く利いていて心配ない。ハングを越す時アブミに頼り過ぎると返ってむつかしくなる。（４級上～Ａ１）

○４Ｐ目を過ぎるとあとは、２～３級の簡単な登りである。

○Ａフェースはホールド、スタンス共に大まかで、確実で快適である。

総合して、中級者向きの非常に良いルートだと思う、難しいが決定的なところはハーケンが良く利いて居り、岩も堅く危険感はない。落石の心配も取付いてしまえば少ない。非常な高度感があり実に快適である。

カラビナは２，３個つなげる場合もあり、２０個は必要と思う。

（秋山　記）

㊇ 北岳バットレス

◎参加者　（Ｃ．Ｌ）目沢　（Ｓ．Ｌ）梶内、岩崎、山本、福田、平木、上遠野、佐久間

◎８月２６日

岩崎、山本、福田、佐久間の４人で先発する。朝９時高尾をたち、１５時頃広河原に着く、約２時間で二股の幕営地、夜の雨で天幕がもり、フライの必要性を感じる。

◎８月２７日

雨は午前中で止み、午後約２時間バットレス沢出合でアブ・ザイレン訓練を行う。夕方目沢、梶内、平木が入山。

◎８月２８日

天気は良い、バットレスに取付く。出発間際に上遠野が入山、岩崎を除き、３，２，２のパーティに分れる。ｂガリーから四尾根２パーティ、ｄガリーから四尾根１パーティ。所要時間はｂガリー２時間、ｄガリー２時間半、四尾根

2～3時間。四尾根は非常に快適、帰路は八本南のコルからの沢。

◎8月29日

今日で帰る福田、上遠野が早く中央稜に向う。その後目沢、梶内、山本がCガリーから中央稜の予定で出発したが、Cガリー下大滝に約3時間かかり、又雨も降り出したので中央稜を断念した。一方福田、上遠野は約2時間で中央稜を抜け、そのまま帰京。岩崎、平木、佐久間は北岳まで散歩。

◎8月30日

午前中、バットレス沢の岩で2時間程遊び、15時40分のバスで帰京。
（なおバスは11月3日まで土、日曜運行）

（山本　記）

◇山　行　計　画◇

（日程は未確定）

秋　山　　10月5～15日

北岳バットレス定着後、聖岳まで縦走する。バットレスは2日間で、四尾根及び中央稜を登はんする。

荷　上　　11月1～3日

春山のため横尾へ約200Kgを荷上、横尾尾根取付ルートを偵察する。

冬　山　　12月15～24日

鹿島槍岳へ、東尾根に天幕を上げて登頂する。

スキー　　12月25～31日

栂池御殿場小屋に泊り、西高現役のスキー合宿を指導する。O.B.は白馬岳を往復する予定。

春　山　　3月5～25日

横尾尾根にC_1・C_2・南岳にC_3を設け、槍岳及び北穂高岳へ登頂する。

◇会務報告◇

臨時総会

◎日時　7月2日（日）　14.00～18.00

◎場所　西高小講堂

◎出席者　日沢、田中将、町田、笹田、平沢、林武、岩崎、桑田、稲田、小川、堤内、山本、福田、平木、秋山、上遠野、三浦等、梅原、尾崎、宮武、滝口、三浦潤、（西高）古西、水口、藤田、入戸野、石井先生

Ⅰ　議事　「会則改正の件」その他

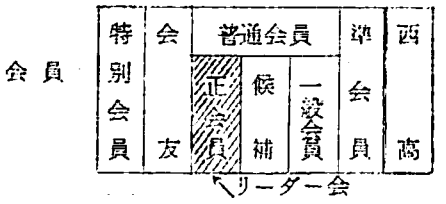
1. 田中将君から現行会則の内容説明
2. 小川君を議長に選出
3. 日沢君から会則一部改正の提案理由説明
   1）会員の分類が会の現状と合致しなくなっているので別図の様に改正したい。
   2）会の主体であるべき正会員会が無実に化してしまっているが、学生会員を中心として立て直し、社会人となった正会員はそれを補佐出来る様な体制を作って行きたい。
   3）会費は現行会則では、一般会員月150円、会友年500円（但し2口以上）となっているのに実際は社会人年2,000円、学生月100円とされているが、これを普通会員年2,000円、学生会員月200円（但し4月に遡る）
4. 上記改正案を拍手で可決、なお成文化は後日委員会が行うことで諒承。

（註　総会開催前に、正会員については正会員と云うものを資格と見るか称号と見るか……終身制とせず活動出来る者のみを正会員とすべきではないか、会費については終身会費制或は会費とせず寄附のみとする等意見があったが、今回はそれ等の問題は一応見送ることとした）

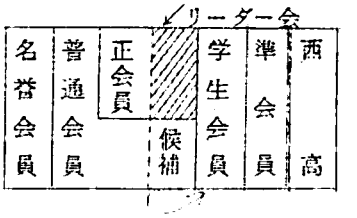
Ⅱ　会食並に若干のかくし芸

Ⅲ　スライド映写

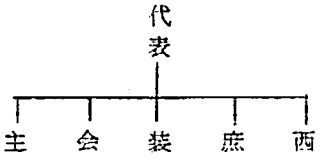
旧会則

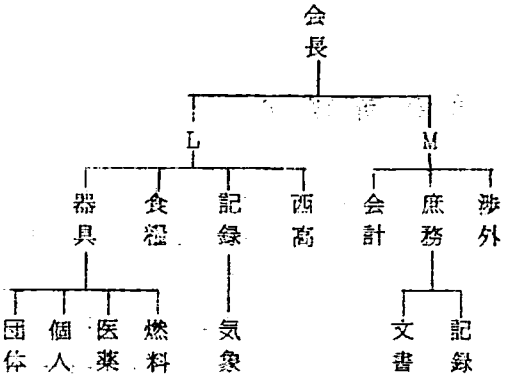


新会則



役員及係





特別委員会

◎日　時　　6月28日　18.30～

◎場　所　　田中金属KK

◎出席者　　田中将、田中実、平沢、笹田、町田、林武、飯塚、（目沢）

◎議　事　　「正会員認定の件」

1. 正会員に任ず

目沢、松田、黒沢、橋本鋼　　S38.4.1付

小川、川田、梶内　S39.4.1付

野原、山本　S40.4.1付

2. 正会員候補に任ず

福田、平木、秋山、上達野　S42.6.28付

なお今までの正会員の任務を、これをもってよしとせず、今後会務に積極的に協力することを確認した。

西朋ロートル会

○8月19，20日

○出席者　笠田、佐藤、田中実、田中将、飯塚、米野、小田、林武、田中康
以上9名

19日夕方、奥多摩川井の水香園に集い、真夜中まで昔話に花を咲かせ、20日昼に散会。

会員住所変更

小田尚於　勤、三井建設総務部人事課
Tel　270−8651　内212，213
自、横浜市戸塚区笠間町1324
大船マンション411
Tel　0467−6−4385

山本省治　自、杉並区高円寺南4−46−1
（住居表示変更）

目沢民雄　自、杉並区荻窪2−60
秋山ビル12号

西高W.V.部活動状況

1. 男子、女子合同

◎ (公) 新入生歓迎会

4月22，23日　川苔山

現役32名　先生1名　O.B. 10名

2. 男　子

◎ (個) 雪上訓練

5月3日　谷川岳幽沢で滑落停止及びグリセード、年間で一番辛い山行

2年10名　O.B. 多数

◎ (個) 奥秩父縦走

5月13～15日　増富―金峰山―甲武信岳―将監峠―落合

3年2名

◎ (公) 御前山

5月20，21日　数馬で幕営、御前山から鋸尾根を経て氷川へ下った。

3年3名　2年11名　1年12名　先生1名　O.B. 三浦等

◎ (公) 丹沢主脈縦走

6月24，25日　塔の岳で幕営、長野へ下った。

3年2名　2年11名　1年9名　先生1名　O.B. 梅原、滝口

◎ (公) 夏山合宿

7月21～29日　二隊に分れ北アルプスを縦走し、双六池で合流

○A隊　折立―次郎兵衛平―薬師岳往復―太郎兵衛平―黒部五郎岳―双六池

3年1名　2年5名　1年3名　O.B. 梅原、尾崎

○B隊　濁―烏帽子岳―水晶岳―双六池

3年1名　2年5名　1年4名　O.B. 梶内、秋山

○合流後　双六池―槍岳―槍尾―北穂高岳往復―下山

◎ (個) 八ケ岳縦走

8月8～11日　大泉―天女山―キレット―赤岳―黒百合平―高見石―茅野

3年1名　1年3名

◎ (個) 南アルプス縦走

8月11～18日　新倉―転付峠―荒川岳―大沢岳―茶臼岳―光岳―大

間

2年6名

◎ (個) 丹沢オバケ沢

8月27日　宮ケ瀬—オバケ沢—大倉尾根

3年1名　2年9名　1年7名　O.B. 平沢、梅原、尾崎、三浦潤

3. 女　子

◎ (公) 三　頭　山

6月4日　小河内より往復

3年3名　2年3名　1年4名　O.B. 林武、岩崎、佐久間、上遠野姉

◎ (公) ソバツブ山

6月17，18日　日原で幕営、ヨコスズ尾根より川苔山赤杭尾根を経て古里へ下った。

3年2名　2年4名　1年1名　先生1名　O.B. 山本、佐久間

◎ (公) 夏山合宿

8月3～9日　白馬大池—栂池—大池—鉢岳—朝日岳—蓮華温泉

3年3名　2年1名　1年3名　O.B. 梶内、山本、岩崎、佐久間、上遠野姉

◎ (個) 丹沢表尾根

8月28日　ヤビツ峠より三の塔山、政次郎尾根を下った。

2年4名

◇ 編 集 後 記 ◇

○　最初「通信」のつもりでしたが、頁数が多くなってしまったし、又グレポン、右岩稜の記録も入ったので、「西朋」にしました。

○　想えば、最後の「西朋」１５号が出たのが、Ｓ３３年１１月ですから、一昔近い年月が流れてしまったわけです。

○　今後は夏山と春山で１回ずつ「西朋」を、間に２ケ月に一度位「通信」を出せれば、と考えています。

係から御願い

○　記録の不明の部分が多くなりました。「西朋」１５号以降の空白を埋める記録集成（もちろん福田、関谷両君の追悼を含め）を出したいと思いますので、Ｓ３３年９月以降の山行を各自想い出して下さい。要領は

1. 期日（何月頃何日間程度でもよい）
2. 同行者名
3. コース（ルート）及び成果

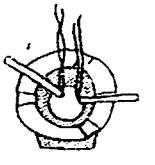
西高現役の指導も含みますが、スキー合宿以外の純ゲレンデ・スキーは不要です。

自から義務と考えて、今年中位に必ず御願します。

○　「彷徨」１４，１６号及び「西朋通信」何号でも御持ちの方は御連絡下さい。会保管用として揃えておきたいと思います。

○　山行報告に限らず、何か発表したい記事がありましたら係へお寄せ下さい。

（平沢）



西　朋　　第16号

昭和42年11月1日発行

編集
発行人　平　沢　　勇

発行所　西　朋　登　高　会
東京都杉並区天沼2－1－2
電話(391)3 6 1 3

印刷者　と　お　び　社
東京都田無市南町 2－1－13
電話(0424) 61 1 5 4 8